

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 24

Bobby Timmons【ボビー・ティモンズ】

～ “ミスター・ファンキー・ジャズ・ピアノ” ～



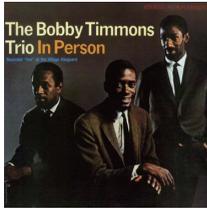
(left to right) Bobby Timmons, Earl Grubbs, Carl Grubbs, and John Coltrane

Photo provided by Carl Grubbs [<http://carlgrubbsjazz.com/>]

Profile

1935年12月19日、米国ペンシルヴァニア州フィラデルフィア生まれ。本名はRobert Henry Timmons。6歳からピアノを始める。牧師であった祖父の影響で幼少期より教会音楽・ゴスペル・ミュージックに親しみ、教会でオルガンも弾き始める。その後、ハイスクールに通いながら地元のフィラデルフィア・ミュージック・アカデミーで音楽を学ぶ。55年にニューヨークに進出し、56年にケニー・ドーハム (tp) のジャズ・プロフェッツに参加。同年5月に同グループのメンバーとのライヴ盤でケニー・ドーハム名義の『ラウンド・アバウト・ミッドナイト・アット・ザ・カフェ・ボヘミア』で初レコーディングを果たす。その後は56年～57年にかけてチェット・ベイカー (tp)、57年にはハンク・モブレー (ts)、ソニー・ステット (ts, as)、リー・モーガン (tp)、ハンク・モブレー (ts) のグループ、58年にメイナード・ファーガソン (tp) のグループで活動後、同年大きな転機となるアート・レイキー (ds) のジャズ・メッセンジャーズに参加。自作曲の「モーニン」が大ヒットを記録し、空前のファンキー・ブームを呼ぶ。59年初頭からキャノンボール・アダレイ (as) のグループに参加し、「ジス・ヒア」等をヒットさせるが、翌60年に再びジャズ・メッセンジャーズに復帰。61年1月にジャズ・メッセンジャーズの一員として初来日を果たす。同年ジャズ・メッセンジャーズから独立し、その後はリバーサイドやプレスティッジからリーダー・アルバムをリリースする等、自己のトリオやグループで活躍する他、ナット・アダレイ (tb)、アーネット・コブ (ts)、リー・モーガン (tp)、ジョニー・グリフィン (as, ts) 等と多くの名演・名盤を残す。1974年3月1日、肝硬変のためニューヨークで死去。享年38歳。

ジャズ・メッセンジャーズから独立後最初のリーダー作



**イン・パーソン
ポビー・ティモンズ・トリオ**
(ユニバーサル・ミュージック:UCCO-9646)

ポビー・ティモンズ (p)
ロン・カーター (b)
アルバート・ヒース (ds)

1. 枯葉
2. ソー・タイアード
3. グッドバイ
4. ダット・デア (テーマ)
5. ゼイ・ディント・ビリーヴ・ミー
6. ダット・デア
7. ポプシー
8. 時々忘れて
9. 朝日のようにさわやかに
10. ダット・デア (テーマ)

ポビー本人が自ら生涯最高傑作と評したピアノ・トリオ盤

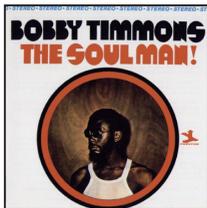


**ポーン・トゥ・ビー・ブルー！
ポビー・ティモンズ・トリオ**
(ユニバーサル・ミュージック:UCCO-9342)

ポビー・ティモンズ (p)
サム・ジョーンズ (b)
ロン・カーター (b)
コニー・ケイ (ds)

1. ポーン・トゥ・ビー・ブルー
2. マリス・トゥワーズ・ナン
3. 時には母のない子のように
4. ノウ・ノット・ワン
5. ザ・シット・イン
6. ネイムリー・ユー
7. オフン・アニー

盟友ウェイン・ショーターも参加した60年代中期の快作



**ザ・ソウル・マン！
ポビー・ティモンズ**
(ユニバーサル・ミュージック:UCCO-9932)

ポビー・ティモンズ (p)
ウェイン・ショーター (ts)
ロン・カーター (b)
ジミー・コブ (ds)

1. カット・ミー・ルース・チャーリー
2. トム・サム
3. ワン・ウェイ・ストリート
4. ダムド・イフ・アイ・ノウ
5. テナージ
6. リトル・ワルツ

名コンポーザーとして

教会の牧師であった祖父の影響で幼少期よりゴスペル・ミュージックの影響を受け、ソウルフルでファンキーなピアノ演奏スタイルを創り出したポビーがこの世を去ったのは38歳の時。若過ぎる死ではあったが、偉大なジャズ・ピアニストとしてだけでなく、偉大な作曲家としてもジャズ史にその名を刻み込んでいる。一番有名な曲は何と言ってもアート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズの代表曲である「モーニン」(Moanin')だが、黒人たちの人種差別に対する嘆きやうめきを象徴したタイトル、文字の読めない黒人にゴスペルの歌詞を教えるための「コール・アンド・レスポンス」の手法を用いたイントロといひ、ポビーにしか書けない名曲だ。その他、「ダット・デア」、「ソー・タイアード」、キャンボール・アダレイがヒットさせた「ジス・ヒア」等、独特のゴスペル・ライクなメロディ・ラインは「ポビー・マジック」と呼ばれる魔球のようだ。

録音は1961年10月1日。ニューヨークの老舗ジャズ・クラブ「ヴィレッジ・ヴァンガード」で実況録音されたライブ盤。本作において特筆すべきは、数ヶ月前にジャズ・メッセンジャーズから独立後、ポビーにとって最初のリーダー作であり、この録音から2年後にマイルス・デイヴィスの黄金クインテットに参加することになる若きロン・カーターのベースがフィーチャーされていること。ライブの臨場感も抜群で、ポビーの代表曲のひとつであるファンキーな「ダット・デア」がテーマ演奏2曲を含めた3パターン収録されていることも興味深い。ポビーの他のリーダー作にも参加しているロン・カーターのソロとバックイングも素晴らしく、あのマイルス・デイヴィスに雇われた理由もよく分かる。

「ん〜優しい、いや、シブい！」。このクールなジャケットだけでも手元に置いておきたいのだが、『ポーン・トゥ・ビー・ブルー！』というタイトルもシブい。録音は1963年。ポビーのオリジナル曲「ノウ・ノット・ワン」や「ザ・シット・イン」ではポビーならではのブルージーでファンキーなサウンドを味わえるが、ジャケット同様に全体的にファンキーなイメージを控えめにしたクールな雰囲気も漂う。曲毎にサム・ジョーンズとロン・カーターがベースを担当し、ドラムにMJQのコニー・ケイを従えたトリオで、全7曲極上のピアノ・トリオ・サウンドを聴かせてくれる。何を隠そう、ポビー本人が自ら「生涯最高傑作」と評したアルバムとして、ポビーファンならずも一度は耳にしておきたい一枚！

録音は1966年1月。タイトルは勿論、ジャケットのデザインを見る限りジャズというよりR&B、ソウル系のアルバムにしか見えませんが、こんなファンキーさもポビーならではの魅力。異色作と呼べる作品だが、参加メンバーが凄！マイルス・デイヴィスのクインテットで活躍したジミー・コブ、ロン・カーターに、ポビーと共にジャズ・メッセンジャーズでも活躍した盟友ウェイン・ショーターという顔ぶれ。そのウェイン作の「ナム・サム」、ロン・カーター作の3曲「ワン・ウェイ・ストリート」「テナージ」「リトル・ワルツ」に、ポビーのオリジナル2曲「カット・ミー・ルース・チャーリー」「ダムド・イフ・アイ・ノウ」の全6曲を収録。本作でもポビーのゴスペル・ライクなメロディ・ラインが炸裂！

ファンキー・ジャズ！

ジャズ史においてファンキーなジャズ・ピアニストといえば、ホレス・シルヴァーとポビーの名が挙げられる。共にジャズ・メッセンジャーズに多大な貢献を果たしたピアニストであるが、この2人こそファンキー・ジャズ・ブームの真の功労者といえよう。

ポビー初来日

1961年の元旦にジャズ・メッセンジャーズの一員として初来日を果たしているポビーだが、結局これが唯一の来日となった。この時の音源や映像も残されているが、ステージ以外ではメンバー全員が赤坂のクラブ「花馬車」での歓迎会、女優の(初代)水谷八重子や娘の良重とその夫でジャズ・ドラマーの白木秀雄宅に招かれている。ポビーは終始物静かであったようだが、大阪ではリー・モーガンと心齋橋筋に買い物に行ったようだ。